

〈獵師グラックス〉の背景考（長篇「審判」との関係）

——カフカの創作過程の試み(3)——

藤 川 晴 男

Josef K., der Sohn eines reichen Kaufmanns, ging eines Abends nach einem großen Streit, den er mit seinem Vater gehabt hatte – der Vater hatte ihm sein liederliches Leben vorgeworfen und dessen sofortige Einstellung verlangt –, ohne eine bestimmte Absicht, nur in vollständiger Unsicherheit und Müdigkeit in das Haus der Kaufmannschaft, das von allen Seiten frei in der Nähe des Hafens stand. …… (T 414)

この日記は1914年7月29日に書かれている。前日にオーストリア–ハンガリーの南部国境で始まった局地戦が、ドイツの介入を契機にロシア、フランス、イギリスを巻き込み、一週間後には大ヨーロッパ戦争に発展していた。オーストリア–ハンガリー帝国の首都ウィーンを遙か西北に距たる、王城のみ聳えていながら王の居ないプラハに、ユダヤ人フランツ・カフカは半官半民の労働者障害保険協会（Arbeiter-Unfallversicherungsanstalt）で真面目な独身のサラリーマンとしての生活を送っていた。31才になったばかり（7月3日）である。戦争勃発のため彼はプラハ脱出を諦め、プラハに閉じ籠った。F. B. 嬢とは7月12日に既に婚約を破棄している。

ところで、上述の Josef K. とは申すまでもなく、長篇『審判』（‘Prozeß’）の主人公の名なのである。〈ヨーゼフ・K.、さる富裕な商人の息子は、ある夕暮れ、父と激しく衝突したあげく、——父は彼のだらしない生活を難じ、それを即刻やめるように要求したが——これというあてのないまま、港の近くの四方へ開けた空地に建つ商館のなかへ、ただひどく不安定な気持と疲労とを覚えながら入って行った。……〉これは、『審判』の背景の一つとして注目する必要がある⁽¹⁾と同時に、われわれが目下の問題として三年越しに試行錯誤を繰返している『獵師グラックス』冒頭の導入部分（港の情景）とも極めて近接した類縁関係にあるとみなされる描写なのである。犬が飼主の顔貌に次第に酷似してくる以上に、両者は内面的な関係にもあることが感ぜられてならない。この点を縦軸に、前回同様、カフカの創作過程を横軸として追求してみたい、と思う。

文学研究に五つの道がある。1) 時代的背景との関連において 2) 作者との関連において 3) 読み手との関連において 4) 他の文学作品との関連において 5) それ自体を一つの全体として

という論⁽²⁾も一方ではあるようだが、われわれが S. Fischer 版でわずか六頁の小篇『獵師グラックス』を取扱ううち、問題は意外に大きく拡がりはじめているのを感じる。第一論文(1)に於ては専ら、導入部分に関するポート・モチーフのテキストを拾い集めて比較を試みた点では、上記4)の亜流といってよいであろう。また第二論文(2)に於ては当然、作品を

離れたF.嬢との係わりを背景とする上記2)ということになるであろう。そうして何れの場合にも、上記3)読み手との関連において〈作品〉をみ、〈作品〉を解読してゆく姿勢を崩すまいとつとめてきたが、このことは言うてみれば読み手——つまりは、わたし(筆者)を含めたわれわれ(読者一般)との関連の意に外なるまい。ならば本稿はどのような道を歩み、道を切り拓いて行くのであろうか。それはどうも今から明確には分りかねるのである。ただ上記1)の時代背景は、カフカ自身の『日記』から散見出来るであろうし、上記2)は勿論、上記4)がやはり主軸となって、ことによると上記5)に及ぶ展開となる可能性もある。

さて、『審判』をカフカが書きはじめられるようにまで胎動がはじまって、着手するのは8月の第二週である。(そうして、翌1915年1月17日に『審判』の仕事を放棄せざるを得なくなった経緯は、前稿に触れた通りである⁽³⁾)

ちなみに現今読まれていて、余りにもよく知られている『審判』冒頭の一文を引き合いに出してみる。すなわち、

JEMAND MUSSTE Josef K. verleumdet haben, denn ohne daß er etwas Böses getan hätte, wurde er eines Morgens verhaftet. (P 9)

〈何者かがヨーゼフ・Kを誹謗したに違いない、ある朝、何も悪事を働いた覚えがないのに、彼は逮捕されたからである〉。

『審判』の背景として注目しなければならない前述した冒頭部分の書き下ろされた7月29日からこの間、約二週間の間にカフカの内部で何が起ったか? 前稿では主として、創作欲の枯渇しかかった苦渋を、ひとりの平凡なユダヤ女性F. B.にその渇を求めて、「書くこと」と「生きること」との葛藤にあけくれる矛盾したカフカの生きざまを少しく覗いてみたのである。然し、これから先は、というよりはむしろその直前までは、打って変って激しい創作意欲の奔流に押し流されていた。その行きつく先は1914年の暮近くまで、この最後の五ヶ月間をわれわれは作家としての彼の生活の、第二の重要な時期と呼ぶことを躊躇しないであろう。⁽⁴⁾

〈……失敗に終る数多の仕事がはじまった。しかしながら不眠症、頭痛、総じて無能にもかかわらず、ぼくはへこたれない。そのためにぼくの内部で集中した、これこそ最後の活性力なのだ。ぼくは、静かに生きるために人々を避けるのではなく、それは静かに死に至ることができたためだという見解を抱いてきた。ところで今や、わが身を守らねばなるまい……〉
(同上 7月29日 T 416)

〈時間の余裕がない。総動員だ。KとPが召集された。今やぼくは独身の報酬を手に入れる。もちろん報酬については当るまい、独身は罰しかもたらさない。それでもぼくはいかなるみじめな境涯にもほとんど動じないし、以前よりも断乎としている。午後ぼくは工場に行かねばならない。家にも住めなくなった、二人の子供をつれてEが移ってくるからだ。だがぼくは書いてゆく、何がどうあろうと、絶対にだ。これは、ぼくの自己保存のための闘争な

のだ〉。(7月31日 T 418)

〈Kを駅頭に見送る。事務所では親しい連中が回りに集まる。ヴァリーのところへ行ってみたいものだ〉。(8月1日 a. a. O.)

〈ドイツがロシアに宣戦を布告した。——午後水泳学校〉。(8月2日 a. a. O. 第二論文 P. 116参照)

7月31日の『日記』のEとは、三人の妹エリー(1889)、ヴァリー(1890)、オトラ(1892)のうちの長妹であり、義弟が召集をうけ、子供をつれて父ヘルマン(プラハ市内の小間物商)の実家へ移ってきた。弟二人は二才にならぬうちに死んだため、叩きあげの頑健な実業家の父の期待はフランツ(1883)のひょろ長い肩に一身にかかってきた嫌いがある。戦争と時を同じくすると共に彼の〈自己保存のための闘争〉も、ここに開始されたもののようである。それは彼にとって、書くこと以外ではない。(……Aber schreiben werde ich trotz alledem, unbedingt, es ist mein Kampf um die Selbsterhaltung.) 然もここで、『獵師グラックス』のためにも注意を喚起しておいたがよいと思われる作者の言葉、つまり、〈人々を避けるのは、静かに生きるためではなく、静かに死に至ることができるためだ、という見解〉(Ich habe die Beobachtung gemacht, daß ich nicht deshalb den Menschen ausweiche, um ruhig zu leben, sondern um ruhig sterben zu können.)は、或いは作者のまぎれもない肉声であるのかも知れないのである。人を避けるのは静かに生きるためである、という見解がごくあたり前の日常生活の常識であると思われるのに、カフカはそうではなく、静かに死に至ることができるためである、と言う。これは悟りすました老人の述懐であり、鳥獣の自然死に近づいていようだが、31才の青年の言辞としては異様にひびく。この見解の食い違いから直ちに非合理的な〈グラックス〉の作品のなかへと降りて行くことさえ出来ないわけではないが、とも角も、一応われわれの頭の片隅に留めておくべき事柄ではあろう。

8月3日。両親の家が手狭まになってきたため、プラハはビレク小路街にある次妹ヴァリーの住まいにはじめ移り住み、確実に潮のさしてきた創作意欲を満たそうとする。周囲の音に殊更に神経過敏なカフカは、奥まった部屋の路地裏から甲高い近所の人びとの話し声や、口笛までが下から響くのをいちはやく書き留める。〈これがなければ完全に孤独〉(Sonst vollendete Einsamkeit.)であると。そうしてひとり静かになって、7月12日にベルリンの《アスカーニッシャーホーフ》ホテルで、グレーテ・ブロッホとフェリーツェの妹エルナ及び友人のエルンスト・ヴァイス立ち合いのもとに行われた討議の末の裁き⁽⁴⁾——フェリーツェとの婚約の解消を反芻しているらしいのだ、20日ほど前の屈辱をかみしめながら。〈待ちこがれる妻がもはやこのドアを開けることもない。1ヶ月後にぼくが結婚することになっていたらどうであろう。手痛い苦しみの言葉、お前がそれを望んでいた通りにお前はなるのだ、と。苦しみながら壁にしっかり体を押しつけて起ち、怖る怖る視線をおとし、押している手を見る。前の苦しみを忘れさせる新らしい苦しみが現れ、それとともに一度もよい仕事らしい仕事をさせたことのない手にもある種の力でお前の体を維持している、その曲った手を認める。頭をあげれば、またもはじめの苦しみを感ずる。ふたたび視線をおとす。と、こうしてこの上下運動は停止するところがない〉。立ちふさがる前方の壁に頭をおし当てなが

ら、カフカ特有のこの‘身ぶり’と‘手の表情’によるパントマイムは（man が主格）何らかの創造をひかえた助走ともいふべき趣があるが、その創造の核となっているのは、疑もなく F. B. との破談による痛ましい後遺症のようであり、（……Man hebt den Kopf, fühlt wieder den ersten Schmerz, senkt wieder den Blick und hört mit diesem Auf und Ab nicht auf.）何か上下の永久運動を思わせもするおぞましさがつきまとうのである。

向かいにある居酒屋から、7日にはコーラスが聞こえてくる。（Chorgesang aus dem gegenüberliegenden Wirtshaus.）抑揚をつけたひとりの小女の声がよく響く。無邪気な恋の歌曲。警官が現れないかと待ちのぞんでいると、やってくる。娘と警官と客のひとりもとび出し、主人も交じるそのありさまを手短かに活写する。〈「すみません、すみません」と主人は言って、おだやかで懇ろな所作を示す、まるで女と交渉しているようだ。彼がドアを閉めると、戸は外側にすべり出してから、ふたたび閉まる。警官（その態度、とくにその興奮は解せない。なぜなら歌は、彼の職務の退屈さをやわらげこそすれ、邪魔にすることはないだろう）は歩み去る。歌い手たちは、歌う気をなくしてしまった〉。居酒屋の内部の様子が手にとるようによく見える。ひとりの警官がこの居酒屋に近づき、しばらく聞き耳をたてる刹那からこうして立ち去るまで、そうしてその後の居酒屋の結末まで内外は隈なく透視される、短い言葉で。〈眠れそうになく、丁度カフカはこの自室の窓辺にきた〉（- Gerade bin ich zum Fenster gegangen. Schlaf scheint unmöglich.）ところなのだ。面白いスケッチである。権力機関に対する彼の反骨な片鱗も、蛇足ながら窺える。またこれほど近く居酒屋が真向いにある、気を散らされたということでもあろう。

こうした仕事部屋の周囲の模様をあとも一例だけあげてみたい。もっともこれがヴェリーの住まいの仕事部屋の最後ともなったらしい。というのは、9月になるとここを立ち退き、長妹エリーの空住まいであるネルダ通りに引き移ったからである。⁽⁶⁾

Dreiviertel zwei nachts. Gegenüber weint ein Kind. Plötzlich spricht ein Mann im gleichen Zimmer, so nah, als wäre er vor meinem Fenster. »Ich will lieber aus dem Fenster fliegen, als das noch länger anhören.《 Er brummt noch etwas von Nervosität, die Frau sucht stumm, nur mit Zischlauten, das Kind wieder in Schlaf zu bringen.（8月30日、T 436）

〈夜中の2時15分前。向いで子供が泣く。突然同じ部屋にいる男が、まるでぼくの窓の真向いにいるような近さで話す。「これ以上聞いているくらいなら、窓から飛び出したがましだ。」男はなおも神経質に何かぶつぶつ呟く。妻君は無言のまま、ただ、歯の間からもの音をもらしながら、再び子供を寝つかせようとする〉。

7日の居酒屋の描写と、この30日の耳で見た世界の到る処にころがっている的確な若夫婦の普遍化された生態描写を、われわれはまたもや『猟師グラックス』の理解をたすけるため記憶に留めておく誘惑にかられるのだ。それはそうとききの7日になってはじめて、〈きのうと今日とで四頁を書いた。微々たる事がらがなかなかうまく片づけられぬ〉という記事がみえる。いよいよ何かを手書きはじめたらしく、〈怪物ストリンドベルク〉という同じ個所の記述もまた注目に値する。（Der ungeheuerere Strindberg. Diese Wut, diese im

Faustkampf erworbenen Seiten. 8月7日, T 421)

戦争の勃発とともにカフカの心底には、反面こうしたことがにわかに起る。〈墓を越えてゆく砲兵隊。花々、万歳のもろ声。ひきつるように静寂な、驚愕した、注意深い黒い顔、黒い目。ぼくは立直るはおろか混乱している。空の容器だ、もう完全に砕け散っているか、全部がはじめてから砕けてしまっている〉(8月6日, T 419)。外から襲いかかる荒々しい蹻音にあらがうかのように、彼の内部では何か激動が起っている。それは明らかだ。〈虚偽と憎悪と嫉妬に充ち。無能、愚昧、理解の鈍さに充ち。怠惰、弱さ、無防備に充ち。31才〉(同上)。1914年7月3日がその誕生日でもあった。婚約を公告しておきながら最後に破棄したのはそれから10日も経て居らぬ。今から20日余り前の出来事でもある。己れの愚かさ・弱さ・怠りや世事に処する無能・無防備といったマイナスの価値観が一時にふきあがってくる。総じて、‘屈辱’に対する自己告発が、この‘戦い’を契機に内部へ向ってほとぼしった。〈ぼくは自分のなかに偏狭さ、優柔不断、戦う人々に対する嫉妬と憎しみ以外、なにひとつ見出さない。その戦っている人々に、ぼくは熱情をこめて、ありとあらゆる災いを願っている⁽⁷⁾〉(同上) (Ich entdecke in mir nichts als Kleinlichkeit, Entschlußunfähigkeit, Neid und Haß gegen die Kämpfenden, denen ich mit Leidenschaft alles Böse wünsche. T 420) と。

この言葉は、訳の上で人びとの誤解をまねき易い。特にわれわれ、所謂15年戦争のさ中で青少年期を送ってきたものにとっては、‘戦い’が常態化していたのであるから尚更だ。かかる地点より収斂すると ‚alles Böse‘ を〈ありとあらゆる災い〉と訳づけることによって、不幸なできごと・死を筆頭に、さいなんや天変地異・疾病などがすべてのものに願われてしまいかねない。ところが、この ‚Böse‘ を〈悪〉と訳し直せばどうなるであろう。〈悪〉という抽象語を「広辞苑」(新村出編 岩波書店)で調べてみよう。①われわれにとって有害な自然および社会の現象。天災、病気、不都合な風俗、制度など。②道徳に反する意志や行為。→善。③邪気。④(接頭語的に用いて)ただけしく悪強いことを表わす。「-源太」⑤歌舞伎の敵役(かたきやく)。「色-」。色々なくあく〉があるが、〈悪〉と訳し直せば、〈禍い〉の①の意味の外に自ら②の意味が含まれてくる。——道徳に反する意志や行為。善の反対の悪という意味で、社会や人間の価値観の問題に次元が移行してゆくから、意味の顛倒が極端な場合起ってくる。〈悪〉と訳せば色々な意味にとれる。意味が曖昧になり、視点がぼける。意味が抽象化するだけ拡大解釈されて行く。そうした危惧を上述の訳では一応きっぱりと断っているようだ。がこうなると、いささかカフカに特有な魅力のある意味内容のニュアンスが失われてゆく、そんな気にもなる。けれどもこの坐った訳が、何より戦う人でもあったカフカの真情をあからさまに表現し直し得ていることを改めて教えられる。さきにあげた(7月29日)〈人々を避けるのは、静かに生きるためではなく、静かに死に至ることができるといふ日頃のカフカの見解と、これは対極の裏側でパラレルに対応しているように思われる。文学への高まりは、相当なヴォルテージを持ってきたのだ。

さて、この場でわれわれはついでながらカフカの ‚戦争観‘を一瞥しておきたい。「戦う人びと」といい、「悪」といい、これらのカテゴリーは、現実の ‚戦争‘を除外してみても、カ

フカ文学にとっては重要緊密な相関関係にあるからでもある。

〈悪が人を誘惑するうえで、もっとも効果的な手段の一つは、戦いをいどみかけてくることである〉(H 40)という彼の生理感覚と、(従って、〈その戦いは、ベッドのなかで終わる女たちとの戦いとおなじである〉(a. a. O.)という認識が生じ)〈悪とは、人の気をそらせるものの謂である〉(H 84)ともいい、具体的には〈戦争は、とりわけ空想力の途方もない欠乏に起因〉(J 139)するという考えそのもののなかに、上述の〈戦う人々に対する嫉妬と憎しみ〉の種は胚胎していよう。カフカもトラークル同様⁸⁾空想力が極めて豊富で、戦争に耐えきるためには戦争という悪と拮抗せざるを得なかったし、結果としてカフカはこの機を逆に活用するのである。

また、〈戦争の脅威は、あらゆる現存の保証と慣例との解体であり、動物的な形而下のものが跋扈し、すべての精神的なものを窒息させる、癌のようなものだ〉(J 175)とカフカは、晩年の1923年に同じくG・ヤノーホに述べているが、戦争によって〈人間はどうか瞬間の意識をもつだけ、ただ在るだけ〉となってしまう。その原因を、カフカは〈人間の知識というものと、死への不安〉とに帰している。〈同じことではありませんか〉とG・ヤノーホに言われて、彼は次のように答えるのだ。〈いや同じではありません。生を十全に把握する者は、死を前にして不安を抱かない。死の不安は充足されぬ生の帰結にすぎません。それは不誠実の表白です〉(Nein, das ist nicht dasselbe. Wer das Leben voll begreift, hat keine Angst vor dem Sterben. Todesangst ist nur das Ergebnis eines nichterfüllten Lebens. Es ist eine Äußerung der Untreue. a. a. O.)という。

このエピソードは、ヤノーホが父から1921年のクリスマスに貰った「人類の解放、過去と現在における自由の理念」(Die Befreiung der Menschheit. Freiheitsideen der Vergangenheit und Gegenwart. J 174)という大部の書物のなかの複製、「戦争」(アルノルト・ベックリン)や「髑髏のピラミッド」(W・W・ウェレンチャギン)をながく見詰めていたあとで話したしたことである。

再び、8月6日の『日記』にもどる。すると、戦争の熱気が冷やかにユダヤ人である自らの足の裏をもたたくすぐり出すのである(E 184 f)。

〈愛国主義的な行進。市長の演説。それから人波が消えてゆき、それからまたあらわれ出て、ドイツ語での叫び声、「われらの愛する帝国、万歳、万歳!」ばくは怒った目つきで、つつ立っている。こうした行列はもっともいやらしい戦争の副産物だ。ユダヤ人の商人たちが火つけ役をしているのだが、そのユダヤ人たちは、あるときはドイツ人であり、あるときはチェコ人で、それをなるほどこっそり告白はできても、今のように大きな声ではけって叫びたてられなかった連中だ。もちろん彼らは多くの人々をいっしょにまき込んでゆく。組織だてだけはうまいのだ。これが毎晩くり返され、明日の日曜日には二度もあるのだそうだ〉。(T 420 f)

〈怒った目つきで、つつ立っている〉(Ich stehe dabei mit meinem bösen Blick)カフカは、同属のユダヤ人商人の煽動する愛国行進を〈もっともいやらしい戦争の副産物〉(Die Umzüge sind eine der widerlichsten Begleiterscheinungen des Krieges.)として見すえながら、自分や(同属のブラハ出身のドイツ系)ユダヤ人たちをみる目をも含めた世界の一切を、

彼は〈後退りしてゆくしかめ面にあたっている光、これこそ真実であって、そのほかに真実はない〉という姿勢を、この世でも、芸術の世界のなかでもたえず固く守り切ってとり続けた、とらざるを得なかったということ。ちなみに上述の言葉には以下の言葉がかぶさっているのである。〈われわれの芸術とは、真理によって眩惑されている状態だ、といえる〉(Unsere Kunst ist ein von der Wahrheit Geblendet-Sein: Das Licht auf dem zurückweichenden Fratzengesicht ist wahr, sonst nichts. H 46) と。

ここで顔を出してきた「カフカとプラハ」に就いては、パーヴェル・アイスナーの(金井裕・小林敏夫共訳 審美社 1975) 上記同名の有力な暗示にとむ小冊子にゆだねよう。ただ、われわれにとって大切なアイスナーの忠告・提言だけは忘れずに書き留めておく。そうして、いよいよ次の課題に入ることにしよう。——〈カフカについて書かれたほとんどすべての著作は、解説者たちによる決定的事実の無視によって損われている。フランツ・カフカは、ただそのプラハの観点からのみ、したがって、二度とありえぬ類い稀な境遇を深く認識することによってのみ解明可能なのである〉(Pavel Eisner: *Franz Kafka and Prague*, translated from the German by Lowry Nelson and René Wellek, 1950)。

急激にふきだす内部の衝迫は、ついには〈戦う人々に対してありとあらゆる禍いを情熱的に願う〉までに自らの内部は坩堝と化するのだが、そのことは次いで有名な断章となる〈文学という立場からみれば、ぼくの運命はきわめて単純なものだ〉(8月6日)(Von der Literatur aus gesehen ist mein Schicksal sehr einfach. T 420) と書かれるに及び、その謎を一気に解き明かすかのごとくである。就中この後半部分は、〈グラックス〉の中心テーマに近い重要メモがひかえてもいるのである。いよいよ『審判』を書きはじめようとするさ中にふきでて来、これが8月6日に到って、相次いでここに書き留められている事実、何としても特筆に値する。『審判』本文執筆は翌7日ごろ開始されたものと思われる。

とりあえずいまは、その執筆に関する付随記事と覚しい『日記』だけをとり出してすべて並べた後、再びここに舞いもどることにしたい。

〈きのうと今日とで四頁を書いた。微々たる事がらがなかなかうまく片づけられぬ〉。(8月7日、既出)

〈8月12日。一睡もしなかった。午後三時間ソファに寝ころんで、眠るわけでもなくぼんやりと過ごす。夜も同じような工合。だが、それに阻まれてはならない〉。

〈8月15日。二、三日以来、ぼくは書いている。この状態が続くといいのだが。二年前のときほど、今のぼくは完全には保護されておらず、仕事のなかに這入りこんでもいない。⁽⁹⁾ それでもぼくは、自分の規則づくめの、虚しい、気違いじみた独身生活が、ある正当性をもっているという感じをともかくも抱いてきた。ぼくはふたたび自分との対話を行うことができ、完全な虚しさのなかにもそれほど硬直することもない。ただこのようにしてこそ、

ぼくにとっての回復がある〉。

〈8月21日。かかる希望を抱いてはじめたが、三篇の物語すべてにはね返された。今日が最も手強かった。ロシアの物語はいつも『審判』のあとに書いたがよかった、というのがどうも正しいらしい。明らかに機械的な妄想(Phantasie)をのみ^{たの}みとしているこの笑止な希望のなかで、ぼくはふたたび『審判』を開始する。——全く無益ということはなかったのだ〉。

〈8月29日。一章の結末は失敗。もう一章は鮮やかな滑り出しだが、ほとんどこの調子で続けることはできぬだろうし、間違いなく駄目だろう。あの夜であったなら、きつとうまく行っていただろうに。だが、自分を見放してはならぬ。ぼくは全くの孤りなのだ〉。

〈8月30日。冷やかにして空虚。ぼくは自分の能力の限界を痛感する。ぼくの能力は、もしぼくが完全にインスピレーションにとり憑かれていなければ、疑もなくただ狭い範囲に閉じこもるだろう。しかもインスピレーションにとり憑かれているときでさえ (selbst im Ergriffensein), ぼくはただこの狭い限界内に閉じこめられているにすぎぬと思う。そのときは、閉じこめられているので、当然この限界には気づかぬのだ。にもかかわらず、この限界内に生きるための場所があるのであって、それがためぼくは、この限界を浅ましいほどまでに食い物にするであろう〉。

次いで、〈夜中の2時15分前。向いで子供が泣く。突然……〉という既出の夫婦ものの透徹した生態描写が六行ばかりあり、8月は終る。

〈9月1日。まったくの救いがたい状態でかろうじて二頁書いた。よく眠ったにもかかわらず今日は大変な後退であった。しかし、もしぼくが、これまで他の生活習慣によって抑圧されてきた書くということそのものの最低の苦しみを超え、より大きな、ひょっとしてぼくを待っているかもしれぬ自由のなかへはいろいろと欲するなら、へこたれてはならないことをぼくは承知している (Aber ich weiß, daß ich nicht nachgeben darf, wenn ich über die untersten Leiden des schon durch meine übrige Lebensweise niedergehaltenen Schreibens in die größere, auf mich vielleicht wartende Freiheit kommen will.)。昔からの愚鈍さは、自分でも気づいているようにまだ完全にはぼくから去っていないし、心の冷淡さはおそらく決してぼくから去りはしないであろう。ぼくがいかなる屈辱にも尻込みしないことは、希望を与えると同時に希望のなさをも意味しうる (Daß ich vor keiner Demütigung zurückschrecke, kann ebensogut Hoffnungslosigkeit bedeuten als Hoffnung geben.) T 436 f)〉。

〈9月13日。またもやかろうじて二頁。最初は、オーストリア敗北の悲しみと、将来にたいする不安が(不安といっても、根底では滑稽であると同時に恥辱的なものにも思われる)そもそもぼくの執筆をさまたげるのだ、と考えた。しかし、繰返し執拗にやってきて繰返しその都度克服されねばならぬもの、それはそんなものではなく、愚かさ(nur ein Dumpfsein)

だけなのである。悲しみ自体のためなら、書くとき以外に十分な時間がある。戦争につながるさまざまな思考過程は、いろいろな点でぼくを貪り食らう苦しみの加え方において、かつてのF（フェリーツェ・パウアー）がための煩いに似ているのだ。ぼくはこれらの心痛に耐えることができない。心労で減びるためにぼくは造られているのではあるまいか。……なるほどぼくは、あの当時は比較的に体力が弱まってもおらず全力をつくしてもなおFがための煩いにはほとんど刃向えなかったが、あの当時ははじめの時期だけでも大きな力になったのは、ぼくの執筆であった。今となって、その力をも奪われるつもりは毛頭ない。

〈10月7日。ロマンを押し進めるために一週間の休暇をとった。今日までのところは——今日は水曜の夜で、月曜日に休暇は終るのだが——失敗である。ほとんど書かなかったし、書いても力がなかった。確かに先週も下り坂であったが、これほどまでまずくなろうとは予想できなかった。この三日間の体たらくは、ぼくが役所勤めをせずには生きるに値しないという結論を、早くも許すものなのか？（Erlauben diese drei Tage schon Schlüsse darauf, daß ich nicht würdig bin, ohne Bureau zu leben? T 438）

長篇『審判』執筆が滑り出しはじめたと思ったとき、彼の執筆癖ともいべき数多の仕事が失敗に終る見透しでなりと、同時に轡を並べる事態が起る、そのことは前稿で少しく触れるところがあった。それが8月15日に早くも現れた。自分との対話を行うことの出来る寛いだ気持。とりかかった『審判』より多少ともヴォルテージを落とし、肩の硬直をときほぐそうとして、それから21日までにかかけ、次稿に詳しく言及する『カルダ鉄道の思い出』が書かれるのである。これはわれわれの『猟師グラックス』にとって、〈8月6日〉のこれからの論考の主要テーマにもなる記事以上に重要な〈グラックス〉の前駆資料となる。しかもまた明らかに同年〈12月13日〉に、死の作品化に就いてのカフカ自身の述懐が現れる。Josef K. は明らかに『審判』の主人公であるが、それなればこそ一層、本文冒頭の記述内容の〈グラックス〉との照応関係にわれわれは注目する必要があるだろう。すなわち、『猟師グラックス』は言ってみれば、〈死〉そのものの作品化に外ならないともいえるからである。

晩年カフカはこんなことを日記にしるしている。「最後の地上的な限界に対する突進」「この文学全体が、限界への突進である」（T 553 1922）と。また同じころ「わたしの知っているかぎり、だれの課題も、こんなに困難ではなかった。こう言うことができるかもしれない——それは課題ではない、課題たるものが不可能な課題ですらもない、それは不可能そのものですらもない、それは無だ、それは石女の希望ほどに子供ですらもない、と。しかし、やっぱりそれは、わたしが息をしなければならないかぎり、そのなかで息をしている空気なのだ。」（T 557）というところがある。〈自分の能力の限界を痛感する〉（8月30日）彼の次元は上のような観点から眺められねばならないだろう。

インスピレーションにとり憑かれ、自己のこの限界を浅ましいほどまでに食い物にしなければならないのは今だ、という覚悟が生れる。彼が書くことそのものを最低の苦しみとみなしていること、このことは一応注目しておかねばならぬだろう。そして、自分を向うで待つ

ているより大きな自由のなかへはいりたいなら、汝、へこたれるな！ 最低のこの書くという苦しみに耐えろ、と自己を鞭撻してやまぬ。この大きな向うの自由は現実では果せず、何より彼には捷の門が道を遮った。「死」に到って、臨終の床で救済めく微光が射すのである、いま執筆中の『審判』がそうであるように。また〈グラックス〉にもまもなくその影が現れよう。

昔からの愚鈍と云い、絶えず自己卑下し、意識する青年に特有の数々の自虐のなかで、倫理上ではマイナス面と思われる心の冷淡さは自らも述べるごとくに、彼から決して去らなかつた。こうしたマイナス面の特質をあからさまに到る処で、遠慮会釈なく、残酷なまでに自己糾弾を試みてやまないだろう。嗜虐の性癖が濃厚にあり、それを甘受し、逆用して楽しんでいたふしもある。死そのものを形象化しようという試みは何よりそのよい例でなければならぬだろう。嘔吐感をもって眺める自分を最後に抹殺してやろう、という冷徹さには、ときに大きな笑いが道づれにもなっている。そうして、いま戦われている外界の「戦争」につながるさまざまな思考過程を彼は、〈いろいろな点でぼくを貪り食らう 苦しみの加え方において、かつてのフェリーツェ・パウアーがための煩いに似ている〉（9月13日）と言っているのだ。再びの心労で減じぬためにまた、彼は更に、書きついで行かねばならぬ——F. B. との婚約破棄により、いま生れてきた『審判』（Prozeß' という意は、もともと進行、経過、過程つまりプロセスであり、裁判訴訟が正しい訳である）をものにするために。

さて、急激にふきだしてきた情念の坍塌のなかから現れるのが、〈文学という立場からみれば、ぼくの運命はきわめて単純なものだ〉（同上8月6日，T 420）というカフカの直言だ。〈ぼくの夢のような内面生活を描出することの意義が、ほかのすべてのものを二義的なもののうちに押しやってしまい、それらのものは恐ろしい調子で萎縮し、また萎縮することをやめない。ほかのものは何ひとつとして、ぼくを満足させることができない〉という境地へとめり込んでゆく。〈ところがしかし、この描出するためのぼくの力は、どうもさっぱりあてにならず、もう永久に消えてしまったかもしれないし、またもう一度ぼくを襲ってくるかもしれないのだ。ただししかしぼくの境遇は、その力にとって都合のよいものではない〉。躊躇と惑いはどうしても払拭できない。これは創造の周期の波を自覚して、いはば、無意識なるもの（彼のいうインスピレーション）の到来に自らを托して俟つものの謂なのである。〈この描出するための力にとって都合のよくないぼくの境遇〉の一端は、さきの論考〈猟師グラックス〉の一背景（日記をめぐるFの描話）のなかで若干触れるところがあった。が創造への発酵が起っている。比喩が形成されるに従い、それは自ら自己発展をとげて行く。エネルギーを蓄えて独立し得る可能性を孕む。

……So schwanke ich also, fliege unaufhörlich zur Spitze des Berges, kann mich aber kaum einen Augenblick oben erhalten. Andere schwanken auch, aber in untern Gegenden, mit stärkeren Kräften; drohen sie zu fallen, so fängt sie der Verwandte auf, der zu diesem Zwick neben ihnen geht. Ich aber schwanke dort oben, es ist leider kein Tod, aber die ewigen Qualen des Sterbens. (T 420)

〈……そんなわけでぼくは妙によろめいており、たえず山の頂に飛んでゆくのだが、ほとんど一瞬として、そこにとどまっていることができない。他の人々もよろめいてはいるが、しかしそれはずっと下のほうの地帯でのことであり、彼らは力もぼくより強いのだ。彼らが倒れかかると、その目的のために、彼らと並んで歩いている家族の者が、彼らを受けとめてやる。ところがぼくは、頂上でよろめいている。それは残念ながら死そのものではなく、死んでゆくという永遠の苦しみなのである。〉

よろめいているのは〈山の頂に飛んでゆく〉ぼくも、〈ずっと下のほうの地帯〉にいる〈他の人々〉も同じではあるが、ぼくには彼らのような力になる支えがない。

この場合の〈ぼく〉とは、具体的には独身者を考えてみてよからう。1911年12月3日の『日記』にあるごとく——生涯病床に臥しているような人でも他の人々は、死によってうちのめされるのだ。というのは体が弱いために倒れてしまっているときでも、強くて健康で愛情のある血縁関係者や夫婦関係の人々にすがりついて、彼等は余喘を保っている。従って死によるショックも大きい、というのである。ところが、独身者という奴は、見かけだけは自分の意志で、人生のただ中にいるときから、ますます小さくなってゆく空間に甘んじてゆく。そして彼が死ぬると、ちょうど棺桶が、恰好なものとなる。という独身者の不幸と、独身者の死。彼のこの死に対する考は、〈われわれの救いは死である。がしかし、この世の死ではない〉(H 123) というところまで延びてゆく。〈人間が死ぬと、その死者に関してはしばらく特別な静けさがはじまる。現世の熱病は止んでしまい、ひとつの誤りがとり除かれたような気になって、生きている人々にはほっと息をつく機会。そのためにまた人は死者の部屋の窓をあける〉のだと。『変身』の作者は更につけ加える——すべてが見せかけだけのことだと分り、苦痛と悲嘆がまたはじまるまで(H 122)。そうして〈死の床での嘆きとは、本来ここではほんとうの意味で死が行われたのではないという嘆きである。この死でまだ満足しなければならぬ。まだあいかわらず、この遊びを遊んでいるのだ〉(a. a. O.) という考が、カフカの死の根底にはある。現代の「死」を理解するうえで——すなわち「生」を考えるうえでも亦——極めて示唆にとむ理解の仕方といわねばならぬだろう。

かくて〈頂上でよろめいている〉彼は、「駆りたて」(Jagen) られ、〈人類から外へ出てゆく方向をとった〉(Dieses Jagen nimmt die Richtung aus der Menschheit. T 552 1922) のである。極限にまで達する孤独、どこに通じているか?——それは狂気であろう。だからこれ以上これについては言えない、と彼自身晩年述べている。ただ〈駆りたては、わたしの内部を貫いて行われ、わたしをずたずたに引きさく。あるいはしかし、わたしにできる——わたしにできる?——のは、ほんのちょっとであれ、身をまっすぐに立てていることで、そうなればわたしは、この駆りたてによって、ただ身を運ばれるままにまかせろ。そのときは、どこへ行くことになるのだろうか? 「駆りたて」(‘Jagd’) というのは、もちろんただ一つの比喩にすぎない〉と説明し、それはまた「最後の地上的な限界に対する突進」(‘Ansturm gegen die letzte irdische Grenze’ T 553) でもあり得るという、周知の言葉が浮び出てくるのである。

〈それも、下からの突進であり、つまり人間からの突進であるが、これもまたひとつの比喩にすぎないから、それのかわりに上からの突進、つまりわたしの頭上においてくる突進の

比喩、それを用いることもまたできる〉(a. a. O.)。〈この文学全体が、限界への突進で〉(a. a. O.)あって、こうした孤独 そのもののなかよりも、孤独と共同社会とのあいだにある国境の国(T 548)に、前後左右上下にと広大な領域にわたって棲むわたしである「彼」の、いわば階段状思考が、『獵師グラックス』のなかの中心テーマとして、グラックス自身の口からは次のように語られているわけだ。すなわち、

“Und Sie haben keinen Teil am Jenseits?”

〈それでは彼岸には係わりがないのですか〉という市長の問いかけに対して、グラックスをして作者は、次のように答えさせる。

》Ich bin《, antwortete der Jäger, 》immer auf der großen Treppe, die hinaufführt. Auf dieser unendlich weiten Freitreppe treibe ich mich herum, bald oben, bald unten, bald rechts, bald links, immer in Bewegung. Aus dem Jäger ist ein Schmetterling geworden……《 (B 102)

〈わしは、いつも上に通ずる大きな階段の上にいる。この無窮に拡がる戸外階段の上で、或いは上に、或いは下に、右に左に、たえずわしはさ迷い、いつもゆれ動いているのだ。狩人が一羽の蝶になったというわけですな……〉

これに比べれば、ロビンソンの孤島も、なんと生き生きとした美しい国であったことか(T 548)。かく比較検討してみれば、カフカのさきの〈夢のような内面生活の描出〉に基づく素材を、この『日記』自身十二分に含んでいると思われるし、十分耐えることが出来得よう。頂上でよめいているぼくは、〈死そのものではなく、死んでゆくという永遠の苦しみ〉をあじわう。生きながらに死に、死にながらに生きる獵師グラックスまでの距離はもう視界に見えており、もう一跨ぎとなる。

獵師はこの舟を更に続ける。

……》Immer bin ich in Bewegung. Nehme ich aber den größten Aufschwung und leuchtet mir schon oben das Tor, erwache ich auf meinem alten, in irgendeinem irdischen Gewässer öde steckenden Kahn. Der Grundfehler meines einstmaligen Sterbens umgrinst mich in meiner Kajüte. …… (B 102 f)

〈わしはたえず動いている。大きく上へ舞いあがり、もう頭上でかの門の明りが光り輝くと思えば、わしは昔ながらの、この世の水にさびしくつかっている小舟のなかに目覚めるので。かつての死に方が根本的に間違っていたため、閉じ込められた船室で自分をこうしてあざ笑っているわけさ〉。

死にきれぬ死、〈ただ在るだけ〉ではない死を求めてさ迷うグラックスの〈死〉の裏に潜む作者カフカの死生観を、この年1914年〈12月13日〉の『日記』に照してみると、更にこの

「作品」と作者との関係が明らかに浮び上がってくるだろう。

この日、『審判』の伝説釈義〈掟の前で〉(Vor dem Gesetz)を書きあげ、部分的によくできていると自ら満足の意を表す。次いで翌日『審判』の終章を目前にして、〈最も重要な部分にさしかかり、幸運な一夜の必要性〉(14. Dezember. Jämmerliches Vorwärtskriechen der Arbeit, vielleicht an ihrer wichtigsten Stelle, dort wo eine gute Nacht so notwendig wäre. T 449)を強調する記録がみえ、これら二つの重要報告の間に挟まれて問題の記事は登場する。ここに出てくる〈死〉に就いてのカフカの考え方が『審判』に投影されているのは勿論、今挙げた『猟師グラックス』のなかに同じように反映していることは特に興味をひく。特に読み手の理解を何より正当化して、作品の価値を貶しめたり、むやみにもち挙げたりする必要がある程度なくなるためにも、この個所の『日記』の吟味は忽せには出来かねる性質のものである。

文学仲間のフェリックスのところへ先日行き、その帰途をともにしたマックス・ブロードに言ったこととして再録する。それによると、臨終の床で、苦痛がさほどひどくなければ、非常に満足していただけるだろう、と。そしてそのとき言い忘れ、そのあと故意にそのままにしておいたことだが、満足して死ぬという根拠は何よりも最高の作品のよさによるのだと。人はみな死ぬ、それは辛い。不当であり、そこには厳粛な無常感(Härte)が流れている。それが読者に訴えるのだ、とカフカは少くも考える。次の叙述は、特に注目しなければならないだろう。

くしかし、臨終の床で満足していられると信じているぼくにとっては、こういう叙述は、密かにいうが、ひとつの遊戯である。実際ぼくは、瀕死の状態の中でも死ぬことを喜び、それゆえ意識的に、死へ集中された読者の注意を利用する。ぼくは、臨終の床で嘆くであろう人よりも、はるかに明晰な意識のもとにいる。しかもそれゆえに、ぼくの嘆きは及ぶかぎり完全だといえる。現実の嘆きのように、なにか突然途切れてしまわずに、美しく、澄んで流れてゆく。……〉というのである。

死の描出は、彼にとってはひとつの遊戯(ein Spiel)に他ならぬ。満足して、瀕死のなかでさえ死ぬことを喜び、意識して、死へ集中された読者の注意を利用する(nütze daher mit Berechnung die auf den Tod gesammelte Aufmerksamkeit des Lesers aus)とまでいうのである。臨終の床で自らの死にゆくのを冷静に見守ることが彼には出来る。明晰な意識をもつ彼の嘆きは、それゆえに完全であり、途切れず、美しく、永久に澄んで流れてゆく(meine Klage ist daher möglichst vollkommen, bricht auch nicht etwa plötzlich ab wie wirkliche Klage, sondern verläuft schön und rein. T 449)だろう。そのような死をカフカは心に思えがき、生きて行こうとしたといい得るだろう。そのための文学だし、文学だったというに尽きるように思われる。それが彼のわずかな救いであった。「祈りの形式としての書くこと」(Schreiben als Form des Gebetes. H 348)とは正しくこのことの意味であろうし、それゆえに一層彼は、バベルの堅穴を掘り(Wir graben den Schacht von Babel. H 387)すすまざるを得ない。

まだ『死刑宣告』も書かれぬ1912年3月18日の日記をみると既に、次のように書かれていて注目される。〈人がそう呼びたいなら、わたしは悟りをひらいていた、とも言えよう。それは、いついかなる瞬間にでも、わたしには死ぬ用意があったからである。がしかしそれは

わたしが、自分になすべく課せられていたことを、すべて果たし終えていたためではなく、そういうことはなにひとつやらず、また、そういうことをいつか少しでもやるなどは、まるで望めもしなかったからなのだ〉(T 272)という極めて示唆にとむ、刺戟的な逆説を平然と言っている。29才のときである。また〈わたしが生涯やってきたのは、生涯をお終いにしたいという気に、抵抗することだった〉(断章, H 338)という本心は、是非聞いておきたい万人向の警句と思う。更に〈今朝久しぶりにまたはじめて、わたしの心臓のなかをぐりぐり動くナイフの想念に、喜びを感じた〉(T 137 1911)異常生理体験をもつけ加えておかねばならぬ。また『流刑地にて』(1914年10月)で処刑はすでに実験済みでもあった。

このことを胸に疊んでわれわれは、『審判』の終章最後のシーンでもある、あの処刑の名場面へとしばらく目を転じてみることにしよう。

Aber an K.s Gurgel legten sich die Hände des einen Herrn, während der andere das Messer ihm tief ins Herz stieß und zweimal dort drehte. Mit brechenden Augen sah noch K., wie die Herren, nahe vor seinem Gesicht, Wange an Wange aneinandergelehnt, die Entscheidung beobachteten. »Wie ein Hund!« sagte er, es war, als sollte die Scham ihn überleben. (P 272)

〈しかしKの喉には一人の男の両手がおかれ、もう一人の男が短刀で彼の心臓を突き刺し、そこを二度えぐった。見えなくなっていく目でKはなおも、男たちが彼の顔のすぐ前でたがいに頬を寄せ合って、かたがつくのを見守っているのを見た。〈まるで犬だ!〉と、彼は言った。さながら恥辱が生き残って行くように思われた〉。

仰向けに石切場に横たわるヨーゼフ・Kの、己れを殺す頭上の下手人の男たちのありさまを、見えなくなっていく目でなおも見つめているKの意識は、死を前にかくのごとく明晰である。Kの嘆きは、それゆえに完全であり、途切れず、美しく、澄んで流れてゆく。前述の『日記』の言葉を繰返し見返し、玩味し、呼び寄せてみたくなる、秘密でもかぐもののように。——死の描出は、ひとつの遊戯である、と。満足して、瀕死のなかでさえ死ぬことを喜び、そうして意識的に、死へ集中された読者の注意を利用するのだ、と。

しかしながら、これらの言葉につながるあとの、カフカらしい落ちの意味するものを読みとらねば、上述の美しい言葉の価値も半減するであろうし、〈恥辱〉が意味する適確な内容を見失ってしまうだろう。すなわち、こうして明確に意識できている、美しく澄みきって流れてゆくわたしの嘆きは、母にむかいいつも悩みを嘆いたようなものである。それらの悩みは、まだまだ嘆きと信じさせるにはほど遠いところに足らぬ種類のものなのだ、と言い今まで述べてきたことがらをすべてひっくり返し、震盪しかねないような比喩を彼は弄するのである。そうして最後にこうつけ加える。

Gegenüber der Mutter brauchte ich allerdings nicht so viel Kunstaufwand wie gegenüber dem Leser. (T 449)

〈母にたいしてぼくは、むしろ読者にたいするようなそれほど大きな芸術の浪費はしなか

った〉のだ、といつの間にやら日常の次元にかえってきている。読者にとっては何かはぐらかされた気にならざるを得ないが、しかしこうした比喩を用いて前説をうち消すかにみえて、再び新しく生れるイメージに身をまかせながら、読者は〈読者にたいする大きな芸術の浪費〉にきつと目を向ける。成程、『審判』の結末がこれ以外の言葉で書き得なかったのだ、こうなるほかなかった、と読み終ってすべて納得し得る、そこまで作者の書くことの苦闘があって定着した、小説として今世紀屈指の問題作として残された、〈読者にたいする大きな芸術の消耗浪費〉——技術の消耗があったのだと、このぐらいな納得の仕方では読者の気持は宙に浮き上る、そんな折にしばしば行き当る。断定を避け、相対化を図る。柔らかに撓う腰つき、端倪すべからざる思考の渦巻きを閃かせる。

〈12月14日〉もっとも重要な部分にさしかかって、読者にたいする大きな芸術の浪費・消耗の見返り品が、ここに産み出された。その自殺にも近い結末のさきの処刑の場面に引続いて、いわば刑場への道行き文ともいふべき文面を、ここに添えてみよう。彼は冷たい大地に仰向けになって臨終を待つ。

〈彼 (Josef K.) のまなざしは石切場に接した家の最上階に注がれた。突然明りがひとつつくと、ひとつの窓の錠戸が左右に開き、遠く高い処でぼんやり痩せて見えるひとりの人間が急にからだを前に屈め、両腕をさらに前に伸ばした。誰だったか？ 友人か？ 善い人間か？ 誰か関係のあった人間か？ 誰か助けてくれようとした人間か？ 一人だけだったのか？ みんなだったのか？ まだ助かる見込があるのか？〉と。

二、三行先はこうなっている。〈裁判官はどこにいたのか？ 結局お目にかかれなかった高級裁判所はどこにあったのか？ Kは両腕を差しあげ、両手のすべての指を、抔げた〉。

①……Seine Blicke fielen auf das letzte Stockwerk des an den Steinbruch angrenzenden Hauses. *Wie ein Licht aufzuckt*, so fuhren die Fensterflügel eines Fenster dort auseinander, ein Mensch…… (P 271 f)

②……Wohl aber erkennt er jetzt im Dunkel *einen Glanz*, der unverlöschlich aus der Türe des Gesetzes bricht. Nun lebt er nicht mehr lange. (P 257, E 159)

③……Der Türhüter verneigte sich tief. Josef sah ihn ohne Gruß flüchtig an. „Diese stummen untergeordneten Personen machen alles, was man von ihnen voraussetzt,“ dachte er, „Denke ich, daß er mich mit unpassenden Blicken beobachtet, so tut er es wirklich.“ Und er drehte sich nochmals, wieder ohne Gruß, nach dem Türhüter um; dieser wandte sich zur Straße und sah *zum wolkenbedeckten Himmel* auf. (T 414)

④ »Immer bin ich in Bewegung. Nehme ich aber den größten Aufschwung und *leuchtet* mir schon *oben das Tor*, erwache ich auf…… (B 102 f)

①と②とは、『審判』物語のなかで互に照応すると思われる名高い箇所である。①の訳読は上述した通りである。②は前日の13日、『日記』に自ら記した伝説釈義 (Exegese der Legende 13. Dez. T 448) と称するものである。周知の、これが〈掟の前で〉(Vor dem Gesetz) と題して、在生中まず雑誌に、ついで短篇集『田舎医者』中の一編として、独立して発表された。②は更に③に照応しており、③のこの原文こそは、本論考冒頭に掲げた文節に続き、〈7月29日〉の『日記』のなかのメモのひとつとして、合せて読むべき性質のものなのである。

〈ある夕暮れ、父と激しく口論をした後〉 Josef K. は〈港の近くの四方へ開けた空地に聳える商館のなかへ、ひどく不安定な気持と疲労とを覚えながら入って行〉く。商館の門番が深く頭を下げる。Josef は礼を返さず、ちらりとそちらを見やる。《このおし黙った下役の者らは、彼等にしてもらわれないと人が察することをすべてやってのけるな》と、彼は考える。《こいつが失礼な目つきでわしを観察している、とわしが思うと、こいつめほんとうにそうするのだな》そう思い彼はふたたび挨拶をせずに、もう一度この門番の方に向き直った。門番は通りに向って、雲に覆われた空を仰いでいる。

このところの「門番」のモチーフが、『審判』そのものを書き進める原動力となったといわれるこれはテキストである。この「門番」は、失礼な目つきで観察していると思う通りの目つきをして、父と言い争いをしたあとの疲れた、至極心理的に不安定な (Unsicherheit) 主人公 Josef K. を、門の傍で遮らずに通過させてしまう、らしい。Kがもう一度、門番の方に向き直ったときには、門番の関心はすでにKを離れ、〈雲に覆われた空〉の涯に向う。その間にKは、この港の近くに聳える商館のなかへ歩みを移しかえることが出来る。つまり、『獵師グラックス』の表舞台としての構造が成り立つ。『死体』を担架にかつゝ葬列に擬した河船 (Barke) の一行が、Kに代るべき獵師 (Jäger, 駆る男でもある) を乗せておもむろに辿りつく、荒い岩肌しか見えぬ奥まった商館のうす暗い二階の裏部屋までが、心なしかこの先には見えている。そこにはカフカの一贯した主題の特質でもある“到着の失敗あるいは逸した目標⁴⁰⁾”が、既に揺らぎ止まないもののごとくに尾をひいている。

『審判』の背景がE. カネッティの解くごとく⁴¹⁾、ベルリンの屈辱的な法廷〔第一回F. B. との婚約破棄、前論考参照〕をカフカが生活意識の核に据えているとするならば、こうした泥沼の男女関係が涯しく更に空転し、一段と深刻な苦悶の様相を帯び破滅〔第二回の婚約破棄〕に向って進んで行くさ中に、断片として成立してゆく「グラックス」が、その執筆に当り、カノンの舟頭を夫婦にみたててリーヴァ (Riva) に入港するその書き出しを、かつて日録しておいた断片から借りてきたという以上の推定には、かなりの確度が生ずる筈である。

そこで最後に、④ということになる。『獵師グラックス』に再び戻る。

〈わたしはたえず動いている。大きく上へ舞いあがり、頭上でかの門の明りが光り輝きだすとみれば、昔ながらの、この世の水にさびしくつかる小舟のなかではとわたしは目を醒まして。……〉

この門が②の「掟の門」と照応していることは、もはや言うまでもあるまい。〈しかし彼はいま暗黒のうちに、掟の門のなかからきらめく一条の不滅の輝きをみとめる。もう余命は

いくばくもない〉と。[引用テキスト (P.33) のイタリックは執筆者による]

——1980. 9. 30

註

- (1) 「フランツ・カフカの生涯」(谷口茂, 潮出版社 1973 P.283)
- (2) 「文章表現法」(平井昌夫, 至文堂 昭和44年 2 文章の読み手 P.35) Leon T. Dickinson, *A Guide to Literary Study*
- (3) 信州大学教養部紀要 第14号 昭和55年3月 「猟師グラックス」の一背景(日記をめぐるFの挿話)——カフカの創作過程の試み(2) P.118参照
- (4) Elias Canetti: *Der andere Prozeß* P.82——Kafkas Briefe an Felice (Carl Hanser Verl. 1973) 及び *Periodisierung und Entwicklung von Ingeborg Henel* a) *Das Frühwerk* b) *Vom Urteil zum Prozeß* c) *Die Landarzt-Phase* d) *Das Spätwerk* (Binder, *Kafka-Handbuch* 2 Kröner Verl. *Das Werk und seine Wirkung* P. 220~241)
- (5) 23. Juli (T 407): *Der Gerichtshof im Hotel*. 28. Juli (T 411)
- (6) 信州大学教養部紀要 第14号 a.a.O. P.134 H. Binder の註記参照
- (7) 「カフカ 実存と人生」(辻 瑠, 白水社 1970 P.177)
- (8) Gustav Janouch: *Gespräche mit Kafka* (S. Fischer Verl. 1968) P.139
- (9) a.a.O. H. Binder の註記 P.133 1912年のイタリックの部参照。同時に本文 P.20, 註(4)との比較照応。
- (10) 「カフカ論集」(國文社〈詩人カフカ〉—フリードリヒ・バイスナー P.249 昭和50年)
- (11) a.a.O. P.68 (...*Die Verlobung ist zur Verhaftung des ersten Kapitels geworden, das > Gericht < findet sich als Exekution im letzten.*)

■原典略語表

- T: F. Kafka, *Tagebücher 1910~1923*, (S. Fischer Verl. 1950)
 P: F. Kafka, *Der Prozeß* (S. Fischer Verl. 1946)
 H: F. Kafka, *Hochheitsvorbereitungen auf dem Lande*, a.a.O. 1953
 E: F. Kafka, *Erzählungen*, a.a.O. 1965
 B: F. Kafka, *Beschreibung eines Kampfes*, a.a.O. 1946

■数多先蹤の翻訳の恩恵を蒙った。辻, 吉田(仙), 谷口, 本野諸氏には特に感謝申し上げる次第である。